

「植えた者の尊さ」

参考著書「江戸は心意気」山本一力著より

8代将軍徳川吉宗は、江戸の各地に桜の苗木を植樹させた。
「苗木が育てば、桜の名所となる。そうなれば人が多く集まり、植えた民も喜ぶであろう」
およそ、このようなことを幕閣に言い置いたそうである。

向島から押上村にかけての大川（隅田川）の土手。
王子から飛鳥山一帯の農家と山村。
吉宗が思い描いた通り、時が過ぎた後のこれらの土地は、桜の名所となった。
そして武家、町人を問わず、季節になれば江戸中から見物客が押し寄せた。
苗木とは「樹木の苗。移植するためには育てる若い木」で、育つには何十年もかかる。
つまり苗木を植樹する者は、次代を担う者にその成果を託すことになる。
桜でいえば、満開の花を愛でるには少なくとも十年単位の時が必要だ。

名将軍と称えられた吉宗は、享保元年（1716）から延享二年（1745）まで、八代将軍の座にあった。これは家斉の51年、綱吉の30年に次ぐ、歴代三位の長さである。
しかし、その吉宗ですら、存命中には飛鳥山の繁栄を知ることはなかった。
桜の名所として見物客が押し寄せ始めたのは、吉宗没後二十数年を過ぎた明和8年（1771）年以降のことである。
今年も見事な花を咲かせた桜の名所は、全国に数知れずあるだろう。
その多くは、野生ではない。
いつか誰かが、そこに植えたものだ。
先人が汗を流してくれたお陰で、数十年を経たのちに、人は豪勢な花の饗宴を愛でることができる。
今の自分のためではない。のちに続く誰かが喜ばばいい…。

植樹に限らず、後世の役に立てばいいと考えて布石を打つのは、日本人が代々受け継いできた「生き方の原点」の心得である。

もしも吉宗が己の名声のみを欲した将軍なら、苗木の植樹などは命じなかつただろう。
カネの力で新しい橋を架けたり、芝居小屋をこしらえたり、寺の山門や本堂を建立させたりするほうが、はるかに形は分かり易い。
5代将軍綱吉は、上野寛永寺に根本中堂の建立を命じた。
その材木手配を請け負ったことで、紀伊国屋文左衛門は一代で大富豪にのし上がった。
ところが根本中堂は、落成して幾日も経ずに火事の巻き添えを食らって、焼け落ちた。
紀文も没する時には、無一文に近かったとの説もある。
吉宗が命じた桜は、今にいたるもその子孫の木々が花を咲かせている。

手早く手にしたものは、失うのも瞬時だ。
人生は短いようでいて、長い。
選べるものなら、没したのちに花が咲き、ひとに長く喜ばれる生き方の方がいい。

コメント

桜の季節です。今年から、誰か植えた人のことを感謝して、満開の桜も愛でるようにしましょうね。

後世の役に立てばいいと考えて布石を打つ日本人の「生き方の原点」の心得。
紀州の山林も同じことですね。
今はすぐには役に立たないが、いつかはきっと役に立つ時がくる。
その為に今から布石を打っている。
ビジネスでも同じことが言えます。
まさに、教育への投資などは、すぐには結果・成果が出ないかもしれないが...
長期的な視点から俯瞰すると、最終的には大きな差につながるんですね。